

【電子かわら版 チャペル・アワー No.009】 2020年6月9日(火)

★今週の前奏："Nicaea"のテーマによる前奏曲 = 今週の賛美歌の変奏曲

<https://www.youtube.com/watch?v=aniSIHuvini>

(楽曲や演奏者等に関しては文末の解説を参照)

★今週の聖書：ヨハネによる福音書 14：8～20

★今週の賛美歌：351番「聖なる聖なる」

<https://www.youtube.com/watch?v=ORUundl5UEQ>

(楽曲に関しては文末の解説を参照)

★今週のアート：Taddeo Crivelli 作、「The Trinity (三位一体)」, 1460-70t ごろの作品

<https://www.britannica.com/topic/Trinity-Christianity>

(詳細に関しては文末の解説を参照)



★ 「神とイエスと、聖霊と」

先週、私たちは「ペンテコステ＝聖霊降臨日」の日曜を記念してチャペルを持ちました。「あなたたちのところに、また来る。そしてずっと一緒にいる」と約束して天に昇って行かれた復活のイエスを信じて、エルサレムの宿で祈っていた弟子たちの上に「聖霊」が降り、復活のイエスこそ神の子、キリスト（救い主）なのだ、という「新しい信仰」（ユダヤ教、という従来の教えに対して）を多くの人の前で証言し、仲間を集め「教会」を形成してゆく、そのきっかけとなった出来事を記念する日曜を憶えてのことでした。

「風」と「炎」が、聖霊の強く激しい「力」を象徴するものとして出てきました。そして賛美歌を通してもう一つ、「鳩」が、聖霊の存在を象徴するしるしであることも知りました。なぜ「鳩」なのか、との質問が（かなりたくさん）ありました。「風」や「炎」が、激しい力、強い大気の流れが存在することを表す（つまり、そこには命の息＝神の息がある＝創世記2章の物語との関連）のに対し、「鳩」は、聖霊と人間との関わりを示唆します。皆さんは鳩が丸くうずくまって、胸のあたりで「クークー」と鳴いているのをみたことがあるでしょう。身体の奥の方でくぐもったように鳴くあの声が、人間が胸の内に秘めて到底言葉にはできないような、神にだけしか訴えることができないような「魂のうめき声」に似ている、との解釈がもとになっていると言われていました。創造主である神と、人の形をとって地上に下った神の子キリストと自分たちとを継ぐものは「内なるうめき＝霊」だから（人間は神の息＝霊を頂いて生きているから）という説明です。

神と、復活のイエス＝キリストと、そして私たち。個別の存在、独自の人格（神とキリストの場合は位格、というのですが）をもった存在でありながら、「ずっと一緒」つまり「一つ」であるということを実現するのが、「聖霊」という訳です。そして、長いキリスト教の歴史のなかで、神とキリストと聖霊は、別々の3つのご神体ではなくて、たとえ私たち人間の目には3つに見えたとしても、その「本質」は一つ、分割されたり反目しあったりすることのない、和解と平和の「一つの共同体（Communion）」、「唯一の神」として存在する、との信仰が形成されました。ペンテコステの次の日曜は、この「3つの位格、1つの本質＝三位一体」を記念する日曜でした。

でもどうして、こんな込み入ったことを、キリスト教の信仰は、わざわざ宣言して記念してきたのでしょうか。

今週読む聖書箇所を見てみましょう。ヨハネ福音書の物語としては、イエスの十字架の前夜、イエスが弟子たちに、これから起こること（イエスの逮捕、十字架、死、そして、復活から昇天、聖霊降臨まで）を弟子たちに何とか伝えようと、言葉を尽くしている場面です。もちろん弟子た

ちは、イエスの話は一体なんのことなのか、この時点ではよく理解していません。でも、イースターからペンテコステまで、聖書を読んだり、チャペルの「メッセージ」を読んだりした後ではどうですか？

「神さまをこの目で見たいのです」とフィリポがイエスに訴えるところから、今週の聖書は始まります。そのフィリポの問いかけに答えるイエスの言葉は「私を見た者は、父を見た」「私が父の内におり、父が私の内におられる」「父が私の内におり、その業を行っておられる」「私が父の内におり、父が私の内におられると、私が言うのを信じなさい」と、父＝神とご自身が「1つ」であることを繰り返し述べています。そして更に、このように言う「私を信じる者は、私が行う業を行う」「私の名によって願うことを何でもかなえる」何故なら「私が父のもとへ行くから」として、イエスと弟子たち（つまり、私たち）もまた「一つ」だといひます。そして、そのために、神から「弁護者」が送られてくる、そしてその弁護者が私たちと「永遠に一緒にいるようにしてくださる」と。

「弁護者」は「真理の霊」とも言われています。私たちは既にその存在を知っており（何故なら神とイエスは一つだから、神から出たものはイエスから出たもので、イエスから出る言葉や行いは全部「知っている」）、それが今後「あなたがたの内にいる」ようになる、何故なら「私はあなたがたをみなしごにはしない」のだから、と。そして「かの日には、私が父の内におり、あなたがたが私の内におり、私があなたがたの内にいることが、あなたがたに分かる」と。

今から後、「聖霊」という存在が、この「互いが互いの内にあり、共にあり、個性を持ちつつ1つである」ことを実現してくれるのだ、それが「平和」だ、とイエスは語ったということなのです。

一人一人の個性が尊重され、互いに独立した異なる存在でありながら、多くの人が「一つ」であること。多くの異なる人たちが「一つ」であるために、誰も圧迫されたり脅迫されたり差別されたりしない。お互いがお互いの存在の一部、私の喜びがあなたの喜びであり、あの人の痛みが私の痛みでもあるような、「一つの交わり」、それは、私たちが心から望んでいるものではないでしょうか。

今、私たちの社会には「違い」がもたらす分断や差別が満ちています。そのために自分とは「違う」存在を恐れ、退け、時に命を奪っても「自分の安全のためには仕方がない」と言い切る態度がまかり通ることがあります。自然災害や、或いは現在のように、治療法が確立していない感染症が流行し、社会＝世界全体が大きな経済的危機に直面すれば、もともと社会の中で「底辺」・「周縁」に押しやられ圧迫されていた人たちが一番先に、一番重大な打撃を受けることはもうよく分かりました。しかし、この危機の中でさえ、打撃を受けて苦しむ人のうめきを、「私のこと」だとして受け止めることのできる人は多数派ではないでしょう。普段の生活の中でなら尚更、「見えない」「聞こえない」苦しみや嘆きに共感することは難しいでしょう。しかし、それが私たち人間の「罪」だとしたら、その過ちから私たちを救い出すために、イエスは復活し、「また来る、そしてずっと一緒にいる」と約束してくださっているのではないのでしょうか。

移民、難民、不法滞在者、「肌の色」が違う、言葉が違う、あらゆる経済困窮者、あらゆる差別のために不当な扱いを受けている人、その人たちと私たちが、「聖霊」の働きによって、そして復活のキリストによって、神の息を分け合う communion [com=共に、unus=1つであること]だとしたら。私の命と、「あの人」の命が、一つの神の命を分け合っているのだとしたら。その命は it matters（それは重要）だと、言わせてくれるのが「聖霊」だと思いませんか。

【祈り】神さま、あなたの聖霊の力によって、私たちに全ての命が重要だ、と確信させてください。あなたの内に平和に共存する、一つの交わりを実現することができますように。アーメン。

*****:

1) 今週の前奏: Robert Hebble 作曲, “Prelude on NICAIA (NICAIA のテーマによる前奏曲)”

演奏は Doug Marshall。フロリダ州 West Palm Beach にある Raymond F. Kravis Center for the Performing Arts に新設された大ホールの開館記念 (2016 年) に演奏されたもの。楽器は、Marshall & Ogletree 社の第 11 作目として建造された、5 段鍵盤のパイプオルガン。

オルガンについてもっと知りたい場合は以下のリンクから (英語ですが)。

<http://www.MarshallandOgletree.com>

2) 今週の賛美歌: 351 番について

曲: NICAIA

作曲は John. B. Dykes(1823-76)。イギリス・ヨークシャー州出身の英国国教会司祭でもある。10 歳で祖父が司祭を務める教会のオルガニストとして仕え、司祭になって後、故郷ヨークシャーのいくつかの教会の司祭、また同州ダラム大聖堂聖歌隊長も務める。生涯で 300 曲以上の賛美歌や合唱曲を作曲し、現在にも歌い継がれるものは多数。NICAIA は、“Holy, holy, holy, Lord God, almighty”(Heber 作詞)という歌詞が、賛美歌として「最高傑作のひとつ」と呼ばれるようになるきっかけを作ったものとして知られる。曲名は、「父である神と、子であるキリスト、そして仲保者である聖霊は 3 つであって 1 つの神」であることを定めた 325 年のニカイア公会議 (Nicaea Eccumenical Council) からとられている。

歌詞: Holy, holy, holy, Lord God, almighty

作詞は Reginald Heber(1783-1826)。ヒーバーも同じく英国国教会司祭。出身地もダイクスに近いモルパス。19 世紀初頭のイギリス賛美歌作詞家として重要な位置を占める。この歌詞は聖霊降臨日の翌週に祝われる「三位一体主日」のために書かれたもので、1826 年、彼がインド・カルカッタの主教として働く中、急逝した年にロンドンで出版された A Selection of Psalms and Hymns for the Parish Church of Banbury に収録された。

演奏: Martin Ellis が 2010 年にアメリカ・シカゴ市に近い the Sanfilippo estate に設置されている、Mighty Wurlitzer 社製パイプオルガンで演奏したもの。変奏は演奏者自身のもの。このパイプオルガンは世界最大、とされるもので、オルガンのパイプは 5000 本を超えているとのこと。劇場にすえられているので、エンターテインメント用の装備もクラシック用の装備も両方備えている。トランペットの音色を奏でるパイプは、本当のラッパのように水平に突き出して取り付けられている (オルガンのパイプは通常、垂直に立てる)。

演奏者の Martin Ellis は、(当時) インディアナポリス交響楽団のオルガン演奏者、また、同じくインディアナポリスの North United Methodist Church のオルガニストでもある。

3) 今週のアート: Taddeo Crivelli 作、「The Trinity (三位一体)」, 1460-70t ごろの作品

1460 年から 70 年ごろの手稿聖書 (当時は手書きで一ページずつ書写して豪華なイラストなども手書きで付けていた) に収載のテンペラ (顔料に卵の殻の粉を混ぜたもの) と金で、羊皮紙の上に描かれている。父である神が、十字架の子であるキリストを支え、二者の間を、鳩の姿をした聖霊がつないで「一つ」の神として存在することを示している。ロスアンゼルス J. Paul Getty Museum 所蔵 (Object no. 2005.2.recto); digital image courtesy of the Getty's Open Content Program。